

『美術資料』（2016年改訂版）の編集にあたって

教本・図書資料委員会

『美術資料』改訂版は、2016年4月の発刊から約半年が過ぎました。今回、編集作業のまとめを掲載させていただく機会を得て、編集の概要や改訂のポイントなどについて報告させていただきます。

現場の先生方には、ぜひ、改訂版『美術資料』に関するご意見・ご感想をお寄せいただき、今後の参考にさせていただきたいと存じます。また、『美術資料』を活用した授業実践の紹介や新たなアイデア、生徒たちの感想などもお聞かせいただけましたら幸いです。



図-1 『美術資料』改訂版

1. 改訂の概要

(1) 改訂の経緯

今回の改訂は、出版社の方針として表現編を中心に行うというものであった。これは、多くの中学校の先生方からの意見として、「表現編については長年改訂されておらず、授業で使いにくいページが多い」という課題が繰り返し挙げられていたからである。

しかし、この『美術資料』は元々表現と鑑賞の二つの資料を合本したものであり、本研究会が直接携わっているのは鑑賞編の部分のみであった。さらに、表現編は東京の編集部、鑑賞編は大阪の編集部と

出版社内でも異なる部署が担当しており、従来から本研究会としては表現編の部分について意見を述べる機会があったが、直接編集には踏み込めないという制約があった。そのため、鑑賞編と表現編の関連するページの繋がりを明示したり、表現編に掲載されている図版を考慮しながら作品選定を行ったり、可能な範囲で使いやすさの工夫を試みてきた。しかし、使用する現場の先生方や生徒達にとっては、1冊の本として見た場合、使い勝手が良いとは決して言えないものであった。

ところが、表現編も鑑賞編も大阪の編集部が担当することとなり、本研究会も表現編の編集に今まで以上に関与することが可能となった。これにより、これまで懸案あった「1冊の本としての使いやすさ」を目指すことが可能になった。今回の改訂では、現場の意見調査・整理、現行本の内容分析、他社発行の副読本の内容分析を行い、個々のページの改善だけでなく、表現と鑑賞が相互に繋がらう事にも時間をかけて取り組むことになった。

(2) 改訂のポイント

この改訂に際し、全国各地で現場の先生方を対象に意見聴取会を実施した。これらの意見聴取において特に大きな問題はなかったため、鑑賞編については以下のように部分改訂を行った。

①他社発行の副読本の分析から、新設テーマについて検討した。その際、現行本の表現編で扱っている「日本の伝統色」のページについては、「デザイン」の中での扱いになっていることが、以前から改善すべき点のひとつに挙がっていたため、今回、表現編の改訂にあたって鑑賞編へ移動させ、それとともに、日本の美意識に関する内容の充実がテーマのアイデアとして挙がっていたこともあり、「和の文様」とあわせて2つのテーマを新設にした。

②その他、部分改訂の内容としては、現行本の分析の中で出てきた解説文の修正や図版の見直し、レイアウトの変更、美術史年表の図版入れ替え、また、教科書改訂に伴う掲載作品の変更などを考慮しながらの作品選定、テーマ配列の変更などを実施した。

さらに、前述のように表現編と鑑賞編の一体化を目指す試みとして、美術資料全体としては以下のような改善を実施している。

① ページ構成の改善

○表現及び鑑賞の両方の場面において、美術の基礎・基本として身につけておきた

い知識や、思考の幅を広げたり発想のヒントとなったりするような事項を、「美のガイダンス」として巻頭に集めた。これらのページは旧版でも「表現を楽しむ！」など特設ページで取り上げていたものも含まれるが、系統立てて配列されていなかったために表現編のテーマの中に埋もれてしまっていたものも多い。

○表現編においても、旧版の各テーマの配列を見直し、系統性にこだわって、ページを追う毎に自然な展開となるように以下のように改善している。

- ・「洋画と日本画」を「ジャポニスム」の次へ
- ・「彫刻」を「動きと時間」の次へ
- ・「肖像画・自画像」を「写真」の前へ
- ・「文化財の保存と修復」を「手づくりの技」の次へ

② 表現編も鑑賞編も扉は「原寸大美術館」で統一

原寸大の鑑賞資料として、表現編扉には「鳥獣人物戯画」（甲巻より）、鑑賞編扉には「アダムの創造」（システィーナ礼拝堂 フレスコ）を選び、実物を実感できるようにした。「鳥獣人物戯画」については模写の資料としても使え、筆の勢いや線描の美しさを感じ取ることができる。「アダムの創造」については、部分の大きさをもとに壁画全体の大きさにイメージを広げ、システィーナ礼拝堂のスケールにも想いをさせることを期待している。

2. 改訂内容の詳細

(1) 美のガイダンス

平成20年3月に改訂された中学校学習指導要領美術科においては、内容に表現及び鑑賞の各活動において、共通に必要な資質や能力を〔共通事項〕として示している。

〔共通事項〕

- (1) 「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。
 ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること。
 イ 形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。

『美術資料』においても、これまでバラバラに配置していた、表現及び鑑賞の各活動において、共通に必要な資質や能力に関するページについて個々のページを改善するとともに「美のガイダンス」と位置づけ巻頭にまとめて掲載することとした。

具体的には、デザインのページに配置していた、「色の整理」「配色の工夫」「モダンテ

クニック」「私のアイデアを伝える」、絵画のページに配置していた「スケッチからはじめよう」「絵の具大図鑑」「遠近感を表す」、展示として示していた「作品を飾る」の各ページを表-1のように改善するとともに新設ページを加え、「美のガイダンス」して巻頭に集めた。

表-1 「美のガイダンス」の内容及び各ページの改善点等

○色の整理	内容充実(「色の調子(トーン)」の追加 等)
○配色の工夫	内容充実(色の演出効果の具体例を示す)
○絵の具大図鑑	内容充実(描画材の種類を増やす)
○色をつくるヒント	新設
○材料と用具大図鑑	新設
○モダンテクニク	内容充実(「ストリング」の追加, 作家作品の掲載 等)
○構図と遠近法	内容充実(構図を追加 等)
○発想し, 構想を練る	入換(「私のアイデアを伝える」を発想・構想に)
○作品を飾る	新設(美術館の展示は「美術館へ行こう」に統合)
○スケッチからはじめよう	作品一部変更

なお、「美のガイダンス」を表現及び鑑賞の各活動において、共通に必要な資質や能力に関するページと位置づけているにも関わらず、観音開きのページ構成の関係から表現編の扉の後に配置している事や、「美のガイダンス」の内容に造形要素としての「光」をテーマとするページを含んでいない事などは今後の課題である。

(2) 表現編と鑑賞編の統一

今回の改訂では表現編と鑑賞編の繋がり、一体化に力を入れて取り組んだ。全体を同じデザイナーが担当し、文字(フォント)やレイアウトなど物理的な統一を試みるだけでなく、まだ十分とは言えないが内容としての統一についても改善を図った。

前述の[共通事項]にもあるように、美術科の指導内容としての「A 表現」「B 鑑賞」は、形や色彩、材料、光などの造形要素を通した学びのための方法・手段である。実際の授業では、表現の学習においても発想・構想の手がかり、表現の意図や目的を深める手段などとして、鑑賞の活動を取り入れる事が多い。また、鑑賞の学習においても、表現技法の理解や制作

の追体験を通しての鑑賞など、表現の活動を取り入れた授業も行われている。実際、表現編と鑑賞編に関連するページが表-2のように多く存在している。

表-2 表現編と鑑賞編で関連の強いページ

表現編	鑑賞編
人物を描く	肖像画・自画像
想像の世界	空想・夢
粘土でつくる 木でつくる	彫刻
色と形の構成 マークのデザイン	伝統の模様(新設)
ポスターのデザイン	平和のポスター
焼き物をつくる 紙でつくる 染める・織る	伝統工芸
写真で表現する	写真

しかしながら、意見聴取会での意見から、表現編と鑑賞編の関連に気付かれていない現場の先生方が多いことが明らかになった。そのため、以下のような改善を行った。

- ①ページ間の繋がりを示す「リンク表示」を見直すとともに、その「リンク表示」の場所についてもページ全体に関わる繋がりはリード文の下に、ページ内の一部分や個々の作品などに関する繋がりはそれぞれの場所に明記するよう改善を試みた。
- ②掲載作品の選定については、作家や作品の重複を避けたり、鑑賞編で掲載できなかった作品を表現編で掲載したりするなど、教科書の改訂に伴う掲載作品の調整も含めて実施した。

以上、統一感のある一冊の本としての改善については、まだまだ課題も多いが、今後の改訂を考えるための手がかりになると考える。

(3) 新設テーマ

①日本の伝統色

日本の伝統色は、旧版では表現編・デザインの項目の中に1ページで紹介されていた。そこでは十二単などに見られる襲の色目を中心とし、その周囲に伝統色の見本を小さく配置するという構成だった。襲の色目は確かに重要な日本文化ではあるが、直感的にわかりにくいこと、応用が難しいことが指摘された。それよりも、色そのものをもっと詳しく、数も増やして紹介する方が生徒の興味を引き、理解を高めると考えた。

そこで、今回の改訂では紹介する色の数を16から32へと倍増させ、見開きで大きく掲載した。数を増やしたとはいえ、多彩な伝統色の中ではごく一握りに過ぎない。そのため、

日本の美術・工芸でよく使われる色、知っておいてほしい色を編集委員全員で議論し、絞り込んでいった。さらに、日本の色名が身近な自然物の微妙な色合いから来ていることがわかるような写真と解説文をつけた。この際、条件にぴったりはまる写真がなかなか見つからないもの(キハダの木の皮、利休鼠に対応するものなど)も多くあり時間を要した。

参考として、伝統色が用いられた作品等の写真を配置した。あえてそこで使われている色を解説することはしていないので、授業の中で生徒に考えてもらうことを期待している。胡粉が盛り上げられた《桜図障壁画》や、群青と緑青でシンプルに構成された《燕子花図屏風》などは特に注目してほしい。

なお、自然物の色がそのまま絵の具や染料になるとは限らないので、身近な伝統色である藍の製造工程をコラムとして入れた。



図-2 日本の伝統色

②和の文様

旧版にはないテーマだが、他社の資料集には掲載されていた。そこで今回の改訂で、これまでになく充実したページとすべく取り組んだ。文様、紋様、模様などこれに関する言葉はしばしば混用されている。本誌では、服の模様などを「和柄」と称し、家紋などのマークは「紋」と呼び、この2つを中心に構成した。

「和柄」のほうは、日常生活でも、美術鑑賞の際にもよく見られる「鹿子」「青海波」など12の文をとりあげ、その形の由来を解説した。おそらく生徒たちもどこかで出会い、なにげなく通過していたことだろう。本書を読むことで、それぞれに名前があり、形に意味があることを知り、今後さらに興味を持って物を見るようになってもらいたい。「紋」については当初、家紋などは家柄の問題につながり、教育の場では扱いにくいという声があった。が、「紋」の優れたデザイン性はぜひとも紹介したいと考え、「家紋」という言葉は使わずに、日本文化の中で広く使われたマークであるとしてとりあげることにした。よく使われるというよりは、形の面白さを重視して「千なり瓢箪」「隅立て卍くずし」など16の「紋」を選んだ。

「和柄」と「紋」、共通する編集上の大きな工夫は、これらにカラフルな色彩を割り振ったことである。通常はモノクロームで表示されることが多い。思い切りカラフルにすることで、紙面が華やかになり、伝統的でありながら現代でも通用するものだというメッセージが伝えられたのではないと思う。使用例の写真も、古くさい感じがしないよう、華やかな作例の浮世絵や、現代のかわいらしい工芸品を選んだ。

コラムとしてアジアの文様を紹介した。外国のものを併せて見ることで、こうしたシンプルな造形の「広がり」と「深まり」を考える材料とした。

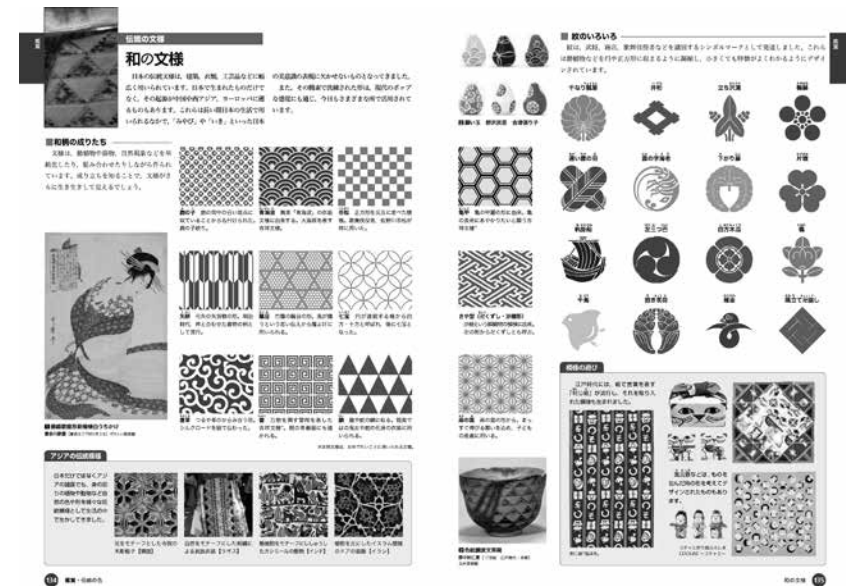


図-3 和の文様

3. 編集後記

編集会議を何度も重ね、この『美術資料』が、生徒の皆さん、現場の先生方にご活用いただける所まできて、今回の改訂作業を無事終わることができました。今回の改訂にご尽力いただいた皆様、そして、秀学社編集部の皆様にご心よりお礼申し上げます。

鑑賞編と表現編が、同時進行で改訂されるという事でしたので、『美術資料』が、一冊丸ごとバランス良く、より充実した内容で、使いやすくあるために、真剣にあらゆる視点で細部までブラッシュアップしていく作業に没頭しました。

会議では、常に、現場の声をはじめ、編集メンバーの先生方からの専門性の高い裏付けのある貴重なご意見や、最新の情報を交えた美術界の動向と照らし合わせながら議論を重ねてまいりました。煮詰まってしまう、どうなる事かという課題も、メンバーでアイデアを積み重ね、乗り越えてきました。様々なアイデアを練っていく作業はもちろん大変ですが、より良い『美術資料』をつくらうという目標の元では、楽しいものでした。言葉はもちろん、図版1つを取り上げても、作品の本来の色を忠実に、多くの点から吟味をし、編集作業を丁寧に進めてまいりました。

学校現場の先生方の声を生かし、学習指導要領を踏まえ、資料としての機能を高める紙面の工夫が出来たと思いますので、是非ご活用ください。中学生を対象に編集を行っていますが、義務教育での現場での活用はもちろん、生徒の皆さんが、卒業しても生涯、傍らに置いていただける価値のある本となっています。生徒にとって、生涯にわたり大切にしたい一冊になってもらえれば、幸いです。

※このまとめは、教本編集委員会のメンバーのうち直接今回の改訂作業に関わった以下の者が執筆した。

大阪市立新豊崎中学校 今江 寿子

大谷大学短期大学部 太田 智子

京都市立芸術大学美術学部 田島 達也

京都市立芸術大学美術学部 横田 学